

<b>Title</b>	東南アジア史からこれからの歴史研究・教育が見える
<b>Author</b>	早瀬, 晋三
<b>Citation</b>	大阪市立大学大学教育. 4 卷 1 号, p.23-31.
<b>Issue Date</b>	2007-03
<b>ISSN</b>	1349-2152
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学教育研究センター
<b>Description</b>	
<b>DOI</b>	10.24544/ocu.20181227-032

Placed on: Osaka City University

## 東南アジア史からこれからの歴史研究・教育が見える

*Historical Studies and Education Seen from Southeast Asian History*

早 瀬 晋 三  
大阪市立大学大学院文学研究科

HAYASE, Shinzo  
Osaka City University, Graduate School of Literature and Human Sciences

### はじめに

新課程用の教科書が出揃った2004年（平成16年）に高等学校世界史教科書A11冊、B11冊を見て、東南アジア史の記述が増えたことに喜びを感じるとともに、これでは現場の教師は東南アジア史を教えるのに苦労するのではないかと思った。増えた東南アジア史の記述は、著作者に東南アジア史を専門とする者が少ないせい、問題となる記述が少なくなかった。なにより、東南アジア史になじみの薄い教える側に疑問・不安があるなかで、東南アジア史を理解することが、これからの世界史・グローバル史を考えるのに重要な意味をもつことを、生徒に伝えられないのではないかと感じた。東南アジア史を高等学校で教えることは、歴史教育・世界史教育の問題だけでなく、「現在を生きる者」にとって「歴史」とはなにかを問う、ひじょうに根本的な問題を含んでいる。

本稿では、まず近代の歴史観を超えるために、東南アジア史を学ぶことの必要性を述べる。つぎに、平成11年（1999年）12月発行の文部省『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（実教出版）から、高等学校の歴史教育の基本を理解する。最後に、高等学校世界史教科書の東南アジア史記述にかんする問題点を整理し、それが歴史研究・教育とどう関係するのかを考える。

### 1. 近代の歴史観を超えるために

すでに西欧中心史観の見直しが唱えられて久しく、また近年グローバル化時代にふさわしい歴史観の必要性が唱えられているにもかかわらず、依然として20世紀に支配的であった温帯の陸域、定着農耕民社会の成人男性エリート中心の中央集権的な歴史像にかわる新たな歴史像が登場しているとは言い難い状況がある。東南アジア史をはじめ、従来の歴史叙述で充分に語られることのなかった地域や時代、人びとは、文献史料に乏しく、近代文献史学では記述することが困難であった。これらの分野の研究は遅れているどころか、まったく手付かずのものも少なくない。加えて、発展途上国の歴史研究は経済発展が優先されるなかで軽視され、研究者自体の数が少なく、優秀な人材を得られない状況にある。なかには、自国の歴史も世界の歴史も、学校教育で満身に教えていない国さえある。また、歴史教育はナショナリズムの高揚のために利用され、学問とは違う次元で語られることも少なくない。偏狭なナショナル・ヒストリーが、世界史の理解やグローバル史の形成の弊害にもなっている。

このままの状況でグローバル史を語ることは、西欧中心史観を助長することになり、欧米を中心とした「知の帝国史」にもなりかねない危険性を孕んでいる。いま、わたしたちは近代文献史学で充分に語ることでできなかった分野の研究をすすめる必要があり、そのひとつが、流動性の激しい海洋民が活躍する熱帯の海

域を含み、女性・子どもの役割が比較的重視されてきた東南アジアの歴史である。東南アジアの歴史を理解することは、これからの世界史を考える恰好の事例を提供し、日本史や中国史、西洋史などの見直しにもつながる可能性に満ちている。

さらに、東南アジア史の理解は、近代歴史学そのものを再考する可能性を秘めている。近代をリードした欧米を中心に発達した、物事を単純化した合理的な考えや中央集権的な組織の形成は、近代国民国家の発展に大いに役立った。しかし、グローバル化と多元文化を尊重する現代において、国家という枠組みを中心とした歴史や単純な進歩史観的な考え、権力をともなう文化・文明の重視といった近代の価値観は、通用しないどころか人びとの交流の妨げになり、戦争・紛争の原因にもなりかねない要素を含んでいる。人生の大半あるいはすべてを21世紀に生きる若者に必要な歴史が、近代の主役ではなかった東南アジアの歴史の理解から見えてくるのである。

新課程用教科書で、文献史料に基づく歴史叙述だけでなく、絵画などの美術や建築、生態系の理解などにページが割かれているのも、近代に発展した文献史学だけでは、十分に歴史を語れなくなってきたからである。しかし、ここで誤解してもらっては困るのは、文献史学の重要性は決して低下したわけではないということである。たしかに、文献以外の歴史資料を利用することによって、新たな歴史像が提出されるようになってきた。いっぽうで、これらの非文字史料を読み解くために、文献史料が大いに役立っていることも事実である。これからの歴史学は、文献史料と非文字史料の両方を使うことによって発展していくことだろう。ただ、現在は時代の転換点にあり、その相互連関がうまくかみ合っていない部分があることもたしかである。

なお、これから指摘することから、教科書記述や執筆者への不信感を抱く人がいるかもしれない。教科書は、長い年月の審議を経て作成され、東南アジア史のように近年急速に発達した分野には対応できない、という構造的な問題が存在する。また、東南アジア史は、基本的な研究言語が国や地域ごとに違い、複雑な文化・社会構成から、少し地域や時代が異なると、東南

アジア史を専門としていると自負している研究者でさえ、十分に理解していないことが多々ある。ましてや、東南アジアを専門としない教科書著作者は、『世界各国史 東南アジア史』（山川出版社、1999年、2巻）、『岩波講座 東南アジア史』（岩波書店、2001-03年、9巻+別巻）や『世界史小辞典 改訂新版』（山川出版社、2004年）などに頼らざるをえない。しかし、複雑多岐にわたる東南アジア史の状況、日本における東南アジア史研究者の桁違いの少なさ、さらには時代の転換点にあって、これらの基本的文献が十分に高等学校世界史教育の要請に答えていると言えないのが現実である。単純化し、わかりやすくしたかつての記述が通用した時代とは違い、東南アジア史だけでなく、はっきりしたことが言いにくくなっているということもある。複雑なものは複雑なものとして、わかりにくいものはわかりにくいものとして理解していくことが重要になっている。東南アジア史を教える現場の問題は、従来見過ごされてきた基本的問題を考えるきっかけになり、ほかの科目・教科にも応用のきくものを提供してくれるだろう。

本来、教科書執筆や高等学校の現場で教えるのに必要な基本的東南アジア史の通史や概説書を世に出すべきであるが、まずは現在の教科書の問題点を指摘することで、東南アジア史の理解とこれからの世界史教育の助けになればと考えている。従来、高等学校で東南アジア史が充分に取り上げられなかったことから、東南アジア史研究者がまともに教科書記述について考えなかったことも事実である。反省を込めて、第一歩を踏み出したい。

## 2. 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（平成11年12月）

文部省は、平成11年3月29日に学校教育法施行規則の一部改正と高等学校学習指導要領の改訂をおこなった。平成15年度から年次進行により実施することとした。『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』は、「その改善の趣旨や内容を解説したもの」で、各学校において「教育課程の基準についての理解を深め、創意工夫を生かした特色ある教育課程を編成・実施」す

ることを期待して書かれた。この解説は、歴史研究者が中心になって書かれたものではない。世界史の10人の「作成協力者」の内訳は、高等学校教諭・校長6名、大学教授4名である。大学教授の内1名は西洋史学が専門だが、2名は社会科教育（歴史）、1名は国際関係論が専門である。

「地理歴史科の目標」は、「我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め、国際社会に主体的に生きる民主的、平和的な国家・社会の一員として必要な自覚と資質を養う」で、「自らがよって立つ民主的、平和的な国家・社会を維持・発展させることについての責任と自覚を養うことがこの教科の最終的な目標である」とされている（7-8頁）。つまり、社会に出て、必要な歴史的知識と思考力を身につけさせるということである。各科目ごとの目標もみておこう。Aは近現代を重視する科目で、Bは古代から現代まで歴史の大きな流れを理解する科目である。

世界史A：近現代史を中心とする世界の歴史を、我が国の歴史と関連付けながら理解させ、人類の課題を多角的に考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う（13-14頁）。

世界史B：世界の歴史の大きな枠組みと流れを、我が国の歴史と関連付けながら理解させ、文化の多様性と現代世界の特質を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う（45頁）。

日本史A：近現代史を中心とする我が国の歴史の展開を、世界史的視野に立ち我が国を取り巻く国際環境などと関連付けて考察させることによって、歴史的思考力を培い、国民としての自覚と国際社会に主体的に生きる日本人としての資質を養う（82頁）。

日本史B：我が国の歴史の展開を、世界史的視野に立って総合的に考察させ、我が国の文化と伝統の特色についての認識を深めさせることによって、歴史的思考力を培い、国民としての自覚と国

際社会に主体的に生きる日本人としての資質を養う（111頁）。

このように各科目の「目標」をみるかぎり、世界史と日本史の違いはなくなっている。世界史を学ぶ者は日本史の知識が必要であり、日本史を学ぶ者は世界史の知識が必要であるというのである。かつて国家という枠内での生活が基本であった時代には、国史が重要であり、国史の理解のうえに世界史を学べばよかった。しかし、いまや世界史の理解抜きには、自国の歴史の理解はできなくなっている。とくに、近現代史においては、世界史と日本史を区別して学ぶこと自体が、現代の社会を考えると無意味になってきているとさえいってもいいだろう。そして、4科目とも、「国際社会に主体的に生きる日本人」ということばで締め括られている。もうすこし、この「解説」を詳しく読んでいくと、この「国際社会」とはとくに歴史的に交流の深い「東アジア社会」のことで、世界史も日本史も、ともに「東アジア社会のなかの日本」の歴史的理解が、基本的な枠組みであることがわかってくる。

このような目標をもつ高等学校の歴史教育と大学の歴史教育を繋ぐ役割を果たしているのが、大学入試センター試験であろう。かつては大学の教員のみが出題にかかわっていたが、現在では高等学校の教諭も加わっている。世界史Bの「世界史への扉」などは、大学入試センター試験の中間リード文を思わせる。大学の教員から受験生に「大学で学ぶ歴史」とはどういうものかを伝えているメッセージとっていいだろう。しかし、大学の教員が高等学校の歴史教育を理解していないのではないかと思えることも、大学入試センターの試験問題からうかがえる。

たとえば、世界史教科書に「中央アジア」という地域名はない。『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』でも、東アジア、東南アジア、南アジア、西アジア、内陸アジアという地域名は使われていても、「中央アジア」はない。にもかかわらず、大学入試センター試験にも、各大学の入学試験にも、「中央アジア」という研究者にとって一般的な地域名が使われている。また、大学入試センター試験の日本史Bは、古代、中世、近世、近現代という時代ごとに出題している。

このことは、『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』の「歴史の追究」のところで述べられている「時代ごとに区切らない主題を設定し追求する学習を通して、歴史的な見方や考え方を身に付けさせる」(116頁)ことに反している。時代ごとに区切ったのでは、その時代の特色がわからなくなり、歴史的な流れを連続ではなく断絶ととらえる傾向が強くなる。また、「細かな事象や高度な事項・事柄には深入りしないこと」(154頁)という指導内容があるにもかかわらず、時代ごとに区切ることによって難問・奇問が増え、大学入試センター試験日本史Bなどの平均点の低さとなってあらわれてくることになる。一部の歴史好きがさらに興味を深めるいっぽう、歴史を「覚える」ことに嫌気し、敬遠する者が増える原因ともなることが考えられる。ともに、現代に繋がる歴史の流れを理解できないままに、「歴史は社会の役に立たない」という「歴史無用論」になる危険性がある。

大学の歴史研究者が考える歴史教育と『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』に書かれていることが違うのは、日本における近代歴史研究の歩みと関係している。日本では、国史、東洋史、西洋史の独自の3分類が、日清戦争のころから当然とされてきた。東アジアの1国としての基盤のうえに、独自の歴史と文化を築き、西洋近代思想をとりいれて形成された日本という近代国家を中心とした歴史観のなかで、この3分類も意味をもっていた。しかし、いまこの3分類が歴史学という学問を理解する弊害になっている。本来、学問としての歴史学と客観的な歴史像を求める世界史教育が一般的であるのにたいして、日本ではこの3分類の影響で歴史学を近代文献史学との関連から西洋史学史として語ったり、世界史を各国史の寄せ集めや便宜的に東洋史と西洋史をあわせたものとしたりしている。日本は、学問としての歴史学と世界史認識が弱い国であることを認識する必要があるだろう。そして、日本の歴史をアジアの歴史の一部として認識しない歴史観は、ほかのアジアからも見放され世界から孤立する危険性を孕んでいることも、現実の時事問題と絡めて考える必要があるだろう。しかし、戦後の日本の歴史研究者は、戦争中に「戦争協力」したことから、現実から逃避する傾向にある。『高等学校学習指導要領

解説 地理歴史編』の「目標」で述べられているような「現代世界の特質を広い視野から考察」したり、「我が国の歴史の展開を、世界史的視野に立って総合的に考察」したりするような研究環境にないのが現実である。

### 3. 高等学校世界史教科書にみる東南アジア史記述の問題点

つぎに、高等学校世界史教科書から見える東南アジア史記述の問題点をとりあげ、4点にまとめて整理する。ここでとりあげるのは、いくつかの明らかな間違いと、視点が偏っていて問題があると考えられるものに限る。明らかな間違いも例示にすぎなく、また、そのほかにも解釈的に問題があるものが数多く見られる。問題となる教科書記述を抜き出し、明らかな間違いには＝、疑問がある箇所には――の見せ消しを上書きした。詳しくは、早瀬晋三『海域イスラーム社会の歴史――ミンダナオ・エスノヒストリー』(岩波書店、2003年)、同『戦争の記憶を歩く 東南アジアのいま』(岩波書店、2007年)、紀伊國屋書店書評ブログ「書評空間」<http://booklog.kinokuniya.co.jp/hayase/>などを参照。

#### (1) 明らかな間違い

##### ●『世界史A』(一橋出版、59頁)

フィリピンのマクタン島に「フェルディナンド＝マゼランの死」という記念碑がある。~~フィリピンを植民地にしてきたアメリカ人が1866年にたてたもので、マゼラン一行の世界周航の偉業をたたえている。ところがその10年後、独立したフィリピン人は、そのそばにつぎのような記念碑をたてた。~~

[解説]

アメリカがスペインからフィリピン諸島を譲渡されたのは、1898年のパリ条約によってで、1866年当時、フィリピン諸島はスペインの植民地であった。フィリピンが独立したのは、1946年のことである。

##### ●『世界史A』(東京書籍、125頁)

~~チュラロンコン王……ミュージカル「王様とわたし」のモデルともいわれる。~~

[解説]

モデルとなったのは、チュラーロンコーン王（ラーマ5世）の父のモンクット王（ラーマ4世）で、野卑な王を聡明なイギリス人女教師が教化するという筋書きのため、ゆがんだモンクット像を広めたとしてタイでは評判が悪く、上映が禁止されている。

●『世界史B』（三省堂、240頁）

……フィリピンでは、~~1830~~年にマニラが自由港になると、マニラ麻やサトウキビなどのヨーロッパ向け農産物の栽培が増大した。

[解説]

スペイン船以外のヨーロッパ船の入港を禁じていたフィリピンにも、イギリス船が入港するようになり、1834年にマニラは正式に海外貿易にたいして開港した。

●『世界史B』（三省堂、342頁）

……フィリピンでは、1965年にマルコス（任1965～89）が大統領となり、独裁体制をきずいた。

[解説]

1986年の「2月政変」でハワイへの亡命を余儀なくされたマルコスの大統領在任期間は1965～86年で、89年にハワイで死亡している。

(2) 西洋中心史観からくる問題

①ヨーロッパ勢力の香料諸島への進出

●『世界史B』（三省堂、137頁）

ポルトガル人は……1511年にはマラッカ王国を倒し、~~モルッカ（マルタ）諸島を獲得した。~~

●『世界史B』（実教出版、166頁）

ポルトガルは、インドのゴアに総督府をおいてスリランカ・マラッカ・~~マルタ諸島（モルッカ諸島または香料諸島）~~を占領し、……

●『新世界史A』（桐原書店、57頁）

ポルトガルは16世紀初め、インドのゴアに根拠地をおき、マレー半島のマラッカ、~~香辛料の特産地モルッカ諸島を支配し、~~16世紀中ごろには明からマカオの居住権をえた。

●『新世界史 世界史B』（山川出版社、161頁）

16世紀にはポルトガル人は鉄砲の威力により、ゴアに総督府をおき、さらにセイロン島・マラカ（マラッ

カ）・~~マルタ（モルッカ）諸島を占領して、~~このアジア内の通商網に加わった。……~~ややおくれて~~スペインやオランダも進出し、アジア貿易に参入した。

[解説]

ポルトガルはマラッカを占領したが、モルッカ諸島では中心地テルナテ島に砦を築くなどして、ヨーロッパ向け香辛料の独占を図ったにすぎない。香料諸島へのヨーロッパ勢力の到達は、ポルトガル1512年、スペイン1521年、オランダ1599年、イギリス1605年であったことを考えると、ポルトガル、スペインが先行し、やや遅れてオランダ、イギリスがアジア貿易に参入したことがわかる。

②ヨーロッパ勢力による東南アジアの植民地化

● [地図] 「17世紀なかばのヨーロッパ諸国の植民地」(『詳説 世界史』山川出版社、198頁)。同様の地図が、ほかの教科書にもある。

[解説]

オランダ領として、ジャワ島、スマトラ島、モルッカ諸島、ボルネオ島南半分が色塗りされているが、当時は要塞を築いて交易の拠点としていたバタビア、テルナテ、マカッサルなどの港以外、実効支配は及んでいなかった。1494年のトルデシリャス条約で管轄区域を定めたように、ウェストファリア条約で主権国家体制が確立されたヨーロッパでは、ほかのヨーロッパ諸国にたいして海外領土の「優先権」を主張した。そのため、海外の王国と多くの条約を結んだが、ヨーロッパ語で書かれた「宗主権」や「保護国」という語は、現地語の交換文書にはなかったか、実効力をもたないものだったと考えられる。オランダのジャワ島での直轄領が大半になったのは1830年のことであり、オランダとイギリスが現在のインドネシアとマレーシア・シンガポールのもととなる勢力範囲を定めたのは1824年の英蘭条約においてであった。当然、現地勢力には実質的な影響はなく、その後オランダが現在のインドネシアとほぼ同じ地域の領有を主張したのは、19世紀の後半になってからである。それまで、オランダの商館は要塞で守られていたところを除いて、継続して存在しなかった。たとえば、教科書の地図でオランダ領とされているボルネオ島南部のバンジャルマシんにオラ

ンダの商館などがあったのは、1603-07、1635-38、1660-69、1747-1809、1817-1942年で、イギリスも同地に1615-18、1635-55、1702-09、1811-16年、ポルトガルも1691-94年に商館などをおいていたほか、デンマーク、フランス、スペインの船も交易に訪れていた時期があった。

このように互いに都合のいい条約文を国内政治に活用した例は、日本と朝鮮のあいだでもみられた。徳川幕府と朝鮮王朝の関係は、徳川幕府側では朝鮮王朝を日本国の臣下とみており、朝鮮王朝側では日本国と対等の関係とみなしていた。両者のあいだをとりもっていたのが、対馬の宗氏で国書を改竄していた。それを暴露した柳川一件がおこったが、将軍家光によってより重く処罰されたのは暴露したほうだった。また、琉球王国が清朝と島津藩に両属するということが容認されたのも、国境線がはっきりしない近世ならでのことであった。近代とは違う近世という時代認識が必要である。

各種辞典・事典で、マカッサル王国、テルナテ王国、バンテン王国が滅亡したり、保護国、属国になったとして、主権を失ったかのように滅亡年が記載されているが、オランダの支配は要塞とその周辺に限られ、ほかのヨーロッパにたいして排他的交易権をもち、現地人の交易などを制限したにすぎなかった。とくに18世紀後半にオランダの影響力は低下し、その制限すら守られていなかった。これらの王国は19世紀後半～20世紀初めまで存続した。

#### ●『詳説 世界史』（山川出版社、249頁）

東南アジアにおいても、西欧勢力の動きは、初期の香辛料獲得などの商業権益の拡大をめざすものから、しだいに領土の獲得へと移行していった。獲得された領土では、一次産品の生産が積極的にすすめられ、それらの生産物は世界市場に直接的に結びつけられた。

オランダは、香辛料の確保をねらって16世紀末にはじめてジャワ島に到達した。オランダは1623年のアムボイナ事件を機にイギリスへの優越を決定的にし、領土獲得にとりかかった。ジャワの諸勢力は抵抗をこころみたまもの、しだいに圧倒されていった。18世紀なかばにはマタラム王国がほろぼされ、オランダはジャワ島の大半を直接支配下に置いた。

#### [解説]

アンボン事件当時、要塞を築いて交易拠点を守るには、あまりに経費がかかり、また香辛料などの貿易からの利益が著しく減少したことから、イギリスは香料諸島から撤退し、インド経営に専念することになった。香料諸島に要塞を築いていたスペインも1663年に撤退した。オランダは、利益の多い長崎の出島での貿易に支えられて、バタビアなどの交易拠点を確保することができた。オランダがバタビアとその周辺以外に直轄地をもったのは1677年のことで、18世紀なかばでもジャワ島の半分にも広がっていなかった。ジャワ島の大半が直轄領となったのは、1830年のことである。マタラム王国は1755年に二分されて、マタラム王国という国名は消滅したが、その後さらに分家して4王家となり、今日まで王家は存続している。

#### ③フィリピン革命（1896～1902年）

##### ●『高等学校 世界史B』（清水書院、145頁）

ルソン島でアギナルドはフィリピン革命を開始し、米西戦争後に独立を宣言したが、この戦争の結果フィリピンを領有したアメリカは、革命政権を降伏させ、アギナルドは日本に亡命した。

独立を宣言するアギナルド フィリピンの紙幣。アギナルドはアメリカ軍に敗北して捕虜となり、その後政治から離れた。

##### ●『世界史A 現代の世界史』（山川出版社、128頁）

スペインの支配下におかれていたフィリピンでは、1880年代からホセ・リサルやアギナルドらの指導する独立運動がはじまり、98年には独立を宣言した。

#### [解説]

1896年8月30日に勃発したフィリピン革命を率いたのは、ボニファシオらが指導する秘密結社カティプナンであった。ボニファシオらを処刑して主導権をにぎったアギナルドは、97年11月1日にフィリピン共和国（ビアクナバト共和国）を樹立した。その後、スペインとの和平協定に調印し、アギナルドらは香港に亡命した。そして、98年4月25日に米西戦争がはじまると、5月にアギナルドはアメリカ船で帰国し、戦闘を再開、6月12日に独立を宣言した。翌99年1月23日にフィリピン共和国（マロロス共和国）を樹立したが、98年12

月10日のパリ条約でスペインからフィリピンを譲渡されたアメリカとの戦争、比米戦争が99年2月4日にはじまり、敗れたアギナルドは1901年に逮捕され、アメリカへの忠誠を誓った。アギナルドが日本に亡命した事実はなく、革命軍の総司令官であったリカルテ将軍がグアム島流刑、香港追放を経て1915年に日本に亡命した。横浜の山下公園に、リカルテ将軍記念碑がある。その後、アギナルドは大統領選挙に出馬したが、敗れた。日本占領期には、日本軍に協力した。

革命の思想的指導者ホセ・リサルは、革命勃発後の1896年12月30日にスペイン植民地政府によって処刑された。日本滞在中に宿泊したホテルの近くの日比谷公園に、記念碑がある。

### (3) 日本中心史観からくる問題

#### ●『新選世界史B』(東京書籍、165頁)

タイのチャクリ朝は、イギリスやフランスから不平等条約をおしつけられたが、独立を維持し、ラーマ5世(チュラロンコン王)が、国の近代化をすすめた。

#### [解説]

タイは、属領であった周辺地域をイギリスやフランスに割譲することで、不平等条約を撤廃することができた。日本は1894年に不平等条約の撤廃に成功したが、99年に実施される前の98年にタイに領事裁判権を認めさせる条約を結んだ。タイの近代法が整備され、欧米各国が領事裁判権を放棄したにもかかわらず、日本は影響力を強めるために日本人顧問を雇用するよう要求するなど、1924年まで条約の改正に同意しなかった。

領事裁判権自体は、けっして不平等条約ではない。領事裁判権は、近代的な法制度のない、たとえば「切り捨て御免」がまかり通るような国で、自国民を守るために必要な近代的な制度である。問題は、それが悪用され、犯罪者を取り締まられなかったことである。現在、沖縄などのアメリカ軍基地に所属する兵士が犯罪を犯しても、日米地位協定によって日本が裁けないのと同じような問題である。

#### ●『詳説 世界史』(山川出版社、317頁)

太平洋戦域では、アメリカ軍が1944年中にサイバ

ン・レイテ島を、~~45年2月にはフィリピンも奪回~~し、4月沖縄本島に上陸した。……日本は8月14日ポツダム宣言を受諾して降伏し、15日国民にも明らかにした。6年にわたる第二次世界大戦はおわった。

#### ●『世界史B』(三省堂、312頁)

……8月14日、日本はついにポツダム宣言を受諾し、連合国に無条件降伏し、翌15日、天皇の放送で国民にこれを伝え、第二次世界大戦は日本の敗戦で終わった。

#### ●『世界史A』(一橋出版、137頁)

8月15日、日本はポツダム宣言を受諾して無条件降伏し、9月2日に降伏文書に調印した。

#### ●『世界史A 現代の世界史』(山川出版社、163頁)

……日本政府は8月14日⑤、ポツダム宣言を受諾して降伏し、第二次世界大戦はおわった。

⑤14日にポツダム宣言の受諾を連合国に通告し、翌15日、ラジオで国民にこれを公表した。

#### ●『新編 高等世界史B 新訂版』(帝国書院、339頁)

……日本も8月14日にポツダム宣言を受諾し、翌15日に戦闘を停止して、第二次世界大戦は終わった。

#### [解説]

近代文献史学では条約の締結、批准、発効が重要な意味をもつ。日本政府は8月14日に全大臣の署名をもってポツダム宣言を受諾し、翌15日に天皇の「玉音放送」があった。世界史的には、日本側代表重光葵・梅津美治郎、アメリカ側代表ニミッツ提督・マッカーサー総司令官が東京湾上で降伏文書に署名した9月2日をもって、第二次世界大戦は終了した。しかし、降伏命令の伝達の遅れから戦闘の続く地域もあった。フィリピンでは、9月3日に現地日本軍が降伏した。南方軍の降伏は9月12日であった。また、国際法上では、1952年4月28日のサンフランシスコ講和条約の発効によって「戦争状態」が終わった。

天皇の「玉音放送」による戦争の終結は、条約を基本とする近代文献史学では意味をなさないが、当時の日本がまさに「皇国」であったことを証明するもので、国史や社会史にとっては重要な意味をもつ。8月15日を終戦記念日としたことは、皇国史観が引き続いたこととお盆が結びついていったからである。また、この「玉音放送」をもって戦闘がほぼ終熄し、占領軍を無

抵抗に受け入れたことは、世界史上でも稀で特筆に値する。それは、同時に大義のない侵略戦争であったことを、日本人自身が理解していたとも考えられる。

アメリカ軍は1945年2月にマニラを再占領し、撤退した日本軍は北部山岳地帯で抵抗した。フィリピンは、アメリカ軍によって解放されたのではなく、再占領された。

#### (4) 東南アジアの理解不足からくる問題

##### ●『高等学校世界史B』（第一学習社、123頁）

シヤム（タイ）では、13世紀ころ、タイ人のスコータイ朝（1257～~~1350~~）が成立して元とも国交を開いたが、~~14世紀なかごろ、アユタヤ朝（1350～1767）がこ~~  
~~れにかわり~~、明との交易によって栄えた。アユタヤ朝には日本や西欧諸国の貿易船も来航した。

##### ●『高校世界史B』（実教出版、巻末年表）

スコータイ（1257～~~1350~~）、アユタヤ（1350～1767）、  
チャクリ（バンコク）（1782～）

##### ●『世界史A』（東京書籍、15頁）

シヤム（現在のタイ）のスコータイ朝（1257～15世紀）、  
~~それにかわった~~アユタヤ朝（1350～1767）でも上座部  
仏教がさかんで、仏教文化が栄えた。

##### ●『世界史B』（実教出版、203頁）

タイ人は、アンコール朝から自立し、13世紀ごろから  
チャオプラヤ（メナム）川中流域に国家をきずいた。  
最初の統一王朝であるスコータイ朝（1257～~~1350~~）で  
は上座部仏教が栄え、クメール文字をもとにしたタイ  
文字もこのころ確立された。ついでアユタヤ朝・チャ  
クリ朝（1782～）が比較的安定した国家を維持した。

[解説]

侵入してきたタイ人は、統一した王国をきずいてい  
たわけではなく、大小さまざまな王国が存在していた。  
13世紀なかごろ建国したとされるスコータイ王国は、  
1351年ころ南方に勃興したアユタヤ王国に滅ぼされた  
わけではなく、1438年に併合され一地方勢力となっ  
たにすぎない。その後1569～1630年には、スコータイ  
王族からアユタヤ王国の王を出している。このように、  
地方勢力が自立性を残したままタイ歴代の王国勢力下  
に入った状態が続いた。単純な王朝変遷では理解でき  
ず、年表で直線で表記することはできない。

#### (5) まとめ

近現代史を中心とする世界史Aは、教育を重視して  
高等学校の教諭が中心となって執筆しており、単純な  
誤りが目立つ。著作者に名を連ねている大学の教員は、  
東南アジア史にかんする知識がなく、十分に理解して  
いないことから、見過ごしているようだ。世界史Bは  
現状の歴史研究を反映しているはずだが、全11冊のう  
ち、東南アジア史を専門としている者を著作者に加え  
ているものは、3冊（3名、すべてベトナム史が専門）  
にすぎない。東南アジア史を専門とする者がかかわっ  
ていても、専門以外のところで単純な誤りがみられる。  
大学の教員自身が、学問としての歴史学や世界史認識  
を共通基盤として研究しているわけではないことが、  
上記でまとめた4点のような問題点にも気づかない一  
因となっていると考えられる。

これらの高等学校世界史教科書の問題は、日本にお  
ける歴史研究そのものの問題を如実に現しているとい  
うことができる。17世紀の地図では、貿易根拠地など  
の点でしか表せないはずであるにもかかわらず、近代  
的な面的支配をイメージさせるものになっている。こ  
れでは時代の違いがわからない。第二次世界大戦の終  
結の日を8月15日とするのでは、近代に支配的であっ  
た文献史学の基本が理解されないことになる。また、  
日本を中心とした歴史が語られていることは、自国の  
歴史を相対化して考察するという、近代科学としての  
歴史学が認識されないということになる。まず、歴史  
学とはなにか、世界史認識とはどういうことか、の基  
本が問われなければならないだろう。

つぎに、『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』  
で期待される歴史教育に必要な歴史研究がされねばな  
らないだろうし、大学での歴史教育もそれを意識した  
ものでなければならないだろう。このままだと、偏っ  
た視点で見た断片的な知識の寄せ集めが「歴史」とし  
て認識され、歴史教育を通して獲得した知識や思考力  
が実社会で活かされない、と考えられてもしかたがな  
いということになる。「歴史研究・教育無用論」につ  
ながる現状を変えていくためには、現在のわれわれを  
取り巻く社会問題と歴史がどうかかわりあうのかを理  
解するための、「臨床の知」としての歴史研究・教育  
が必要である。

## むすびにかえて

これからの歴史教育を考えるにあたって、1枚の絵巻を例に挙げて、むすびにかえたい。長崎の出島にあったオランダ商館絵巻である（「出島絵図」）。絵画には、文献にない歴史的情報があることから近年注目されているが、ここにも文献史料に登場しないマレー系の人びとが描かれている。当時、オランダ船は、貿易根拠地をおいていたジャワ島のバタビア（現在のジャカルタ）から出島にやってきた。その使用人として、マレー系の人が出島にきていても不思議ではない。絵巻に登場するマレー系の人びとは、使用人として給仕をしている様子などが描かれているが、西洋楽器の楽団演奏者、バドミントンをする者としても描かれている。18世紀のフィリピン諸島でも、スペインの植民支配下に入らなかった南部ミンダナオ島のイスラーム地域で、バイオリンが奏でられていたという記録があり、西洋音楽が東南アジアに広まっていたことがわかる。いっぽう、江戸時代の日本には西洋楽器は広まらなかったが、この絵巻には西洋画の影響が見られる。明治以降も西洋音楽は、日本ではなかなか馴染まなかった。また、今日、バドミントンはインドネシアで人気のあ

るスポーツで、2004年アテネ・オリンピックの男子シングルの金メダルと銅メダルをインドネシア人が獲得している。

この1枚の絵巻を理解するためには、日本史、東洋史、西洋史という枠組みはまったく意味をなさない。世界史的な知識が必要である。また、絵画や音楽の知識が必要であり、文化交流という視点も必要である。『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』世界史Bの「目標」である「世界の歴史の大きな枠組みと流れを、我が国の歴史と関連付けながら理解させ、文化の多様性と現代世界の特質を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本人としての自覚と資質を養う」とは、このような絵巻を歴史的に理解させることが含まれているのではないだろうか。

現在の高等学校歴史教科書では、ビジュアルな史料がふんだんに使われている。それがたんなる「お飾り」であってはならないだろう。大学の歴史教育でも、文献以外の史料をどのように読み解いていくのかということが必要である。それは、近代に支配的であった西洋中心史観やナショナル・ヒストリーからの解放にも役立つことである。